

作品タイトル「深夜、四条通にて。」

自粛要請が解かれ、徐々に新しい生活様式が浸透してきた六月半ば。タケルと予定を合わせて呑みに来たのだが、ついつい酒が進んでしまい、キャパオーバーしてしまった。ついでの終電の時間もオーバーしてしまった。コトキンライナーは休止中だと、ニュースでそう話していたのを覚えている。我々二人は、おぼつかない足取りで、四条通を歩いていった。

「すまんな、タケル。ぼくが飲み過ぎてしまったばかりに」

「ええつて。オレも久しぶりに飲めて、楽しかったわ」

しゅんとするぼくに対し、タケルはニイと屈託無く笑った。勿論、笑顔そのものはマスクの下に隠れているのだが。けれど、久々に見る、生の笑顔。生の声。

……ここ最近は一、面と向かって話をする機会が、全く無かった。大学の講義はオンラインに変わり、バイトは無くなり、何処かへふらりと出掛けることも、妹が友人を家に連れてくることも無くなった。

当初こそ、新しい時代の流れを受け入れていた。三密の回避、ステイホーム、ソーシャルディスタンス、デジタル化、等々。実際、趣味に割ける時間が増えたとし、家から出ずに何事も済むのは楽だった。合理的だから。

しかし、日を追うごとに、胸の奥底に、形容し難い蟠りが溜まってきていた。

講義を真面目に受けていても、デジタルガジェットと向き合っている、デリバリーで有名なお店の料理を注文し食べてみても、それは解消されなくて。

一回だけ、それがスウと減少したことがあった。確か……。

「リモート飲み、したよね。だから正確には、久しぶりでは無いんじゃないか？」

「ああ、あれも楽しかったなあ」

少し前、流行っているらしいからやってみいひんか、そんな誘いをタケルから受けた。もつとも、機材も無くやり方も知らないままでの提案だったから、苦笑しつつスマホを通じて色々と指南した。ぼくも興味があったから。紆余曲折あったが、無事に環境は整い、リモート飲みを行った。新鮮で楽しかったし、蟠りも幾分かは軽くなった。けれど、次またやろうという話は、出てこなかった。少なくとも自分には、モチベーションが無かった。デジタルガジェット絡みの話だというのに、熱は一回きりで尽きてしまった。なんだ、こんなモノなのか、と思ってしまった。

当時は、自分がどうしてそう感じたのか、分からなかった。けれど、こうして久方ぶりに家を出て、タケルとお酒を飲み交わし、面と向かって話をする事で、分かってしまったのだ。

他者の温もりを欲していたのだ、と。

デジタルを通じて、人々は気軽にコミュニケーションを取れるようになった。買い物も楽になったし、あらゆる情報を簡単に手に入れられるようになった。自分もそれにどっぷり浸

かっている人間だ。デジタルが生活を楽にする、諸問題を全てを解決する、あらゆる物事を代替できる、漠然とそう思っていた。

しかし、実際はどうだ。ネットを通じて話が出来ると言って、きっぱり逢わなくなるわけでは無い。買い物だって、書店や服屋にふらりと立ち寄って、意外な発見や偶然の巡り合わせを楽しんでいる。旅行だって、ディスプレイで見るとよりも、誰かと一緒にその場へ行って見た方が何倍も有意義だ。

この情勢はぼくに、そんなリアルな出来事の大切さを、デジタルでは替えが効かない、人の生の温かさを、痛感させた。リアルを擲ってデジタルで全てが完結できるとは、到底思えなくなってしまう。デジタル関係を学んでいるぼくが、そんな結論を出してしまうのは良くないのでは、とも思ってしまうのだが。

居酒屋のガヤガヤした音。お酒と味の濃い料理の匂いが混じり合った空気。タケルの声、仕草、笑顔。それらは、デジタルでは再現しようのない、ディスプレイ越しですら伝えきれない、むき出しの現実。全く合理的で無いのに、蟠りはすっかり解消されてしまった。だから、調子に乗って飲み過ぎてしまったのだが。

「やっぱ、顔をつきあわせた方が、何かと楽しいもんだなあ。お店にも、早くお客さんが戻ってきて欲しいわあ」

「……ああ、そうだね」  
しみじみと呟くタケルは、ぼくと同じ事を考えていたようだ。クスリと笑い、首を縦に振る。

現実での繋がりをもっと大切にしよう。そんなことを考えながら歩いていると、目の前の居酒屋から女性が小走りで飛び出てきた。危うくぶつかりそうになる。寸でのところで女性が身を翻し、するりと通り過ぎる。

「大丈夫ですか？」

咄嗟に、声を掛けた。たとえ衝突していなくても、無駄な動作をさせてしまったことには間違いない。

「大丈夫ー！　っと、あれ、おお、久しぶりやなあ、君」

女性はぼくの方を振り返りながら走って行くとしたが、ぼくの顔を見るや否や、つんめりながら立ち止まり、こちらに近づいてきた。

「なんや、陵の知り合い？」

「ええっと……？」

どうやら、女性の反応的に、ぼくとは面識があるようだ。言われてみると確かに、見覚えのある顔立ちだ。しかし、果たして誰だろう？

「ミサちゃんのお兄ちゃんでしょ？　ミサちゃんと仲良くして貰ってる太秦萌の姉、麗です。片手で数えられるくらいしか会ったことないから、覚えて無くてもしかーないわな。以後お見知りおきを」

丁寧な頭を下げられた。かと思うと、がばりと起き上がり、眉を顰めながら口を開いた。

「そんなことより、君ら急がなくてええの？ 終電無くなるで」

「もうさつき無くなったはずじゃ……コトキンライナーだって、まだ無いですし」

だから途方に暮れながら歩いているのだが。すると彼女は、クスリと笑った。

「コトキンライナーなら、この前再開したやん！」

「えっ」

意外な事実を目をしばたかせると、隣でタケルがスマホを開き、「あ、ほんまや」と呟いていた。

「さあ、走らんと本当に夜道をとぼとぼ歩くことになるで！」

「ほなら、いくで、陵！」

「言われなくても！」

一斉に、四条通を走る。果たして、コトキンライナーには間に合うだろうか？ 一種のストリルな賭けに、胸が高まる。このドキドキも、デジタルでは決して味わえないだろう。